郷土館発
なぞの銅鐸のなぞ

郷土館一階、弥生時代の展示棚の中に、高さ十六㎝ほどの小さな銅鐸がある。残念ながらこれはレプリカで、実物は豊川市一宮町の砥鹿神社の宝物殿に、神宝として保管されている。昭和九年に重要美術品、昭和五〇年に愛知県の文化財に指定されたものである。

郷土館のレプリカ

この銅鐸、『設楽町誌』等によると、段戸の山中で三個発見されたものの一つで、賀茂郡羽明村(現豊田市豊松町)の河合全右衛門と唯一右衛門によって砥鹿神社に奉納されたものである。河合氏が砥鹿神社に奉納した時に納められていた箱も保管されている。その表書きの奉納者名の後に、「天保二辛卯年 同國設楽郡作手郷田嶺邨 所掘獲」とあるので、江戸時代後期に発見されたもののようである。

明治三〇年に発行された『尾参宝鑑』に、「設楽郡段戸山より出る者二ツ長サ一尺五寸一は碎(砕の旧字)たり賀茂郡羽明村河合氏も之を所蔵す又小野村大工藤兵衛寳鐸大小二ツを掘得たり」とある。これを信用すると、発見されたのは四個あり、一つは砕けてしまったが、羽明村に持ち帰ったものが、河合氏によって砥鹿神社に奉納されたということになる。

砥鹿神社の銅鐸

残る二つを持ち帰った藤兵衛の住む小野村というのは、現在の新城市連合である。清崎から与良木トンネルを抜けて、連谷小学校の方へ向かう道の下り口あたりに溜水という所があるが、藤兵衛はそのあたりに住んでいたらしい。藤兵衛の持ち帰ったものがどうなったかは、まったくわからない。

断片的な記録しかなく、記録相互にずれがあり、謎に包まれた銅鐸である。元々銅鐸そのものの用途等も推量に過ぎないもので、謎である。

(奥三河郷土館
館長　平松　博久)